

---

# 東方崩天歌

皿舵 ツナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方崩天歌

### 【Nコード】

N9948X

### 【作者名】

皿舵 ツナ

### 【あらすじ】

幻想郷に一ヶ月前に幻想入りした神界の住人。

この物語は神界の住人と幻想郷の住人が織り成す幻想郷ではいつもの日常……なのか？

## 崩天歌ノ一『天使』

「目は覚めたかしら？小さな小さな天使さん？」

目覚めた私の前に立ちはだかったのは傘と扇子を持った金髪の美女だった。

「……ここをどこだか知つての行いですか？」

「ええ……用があるのはこの扉ではない、用があるのは貴方よ。」

「……………私？」

長い沈黙。長い睨み合い。

どうして私に用があるのか分からない。こんな出来損ないの私に。その金髪の人は私に微笑みながらこう言った。

「幻想郷に來ない？」

その言葉が私の人生を180度大きく変えたのかもしれない。

この話は出来損ないの天使と幻想郷の住民が織り成す不思議な不思議な物語。

## 東方崩天歌

いざ開幕。

妖怪の山の裏に存在する中有の道。　ここには死者生者問わず通る道だ。

一ヶ月前にここに扉ごと引越してきた私こと天道てんどう　許斐このみはいつも通り扉の番をしていた。

私がいま守っている扉は天門と呼ばれる扉で天使の住む天界と幻想郷を繋ぐ唯一の扉だ。

それを守っている私も天使で、さらに位階が低い天使を纏める班長なのだが……一身上の都合で同僚からの信頼も無く、さらに全ての天使を纏める長も私との接触をなるべく避けている。しかし私自身はそんなに気にしてはいない。特に幻想郷に来てからは。

「班長へ交代の時間ですよ。」

妖怪の山から人影が二つ見える。声の主は聞き慣れた後輩の声であつた。

桃園ももぞの 湮かいり。私の班に所属している後輩天使。年は150歳。（天使の中ではまだ若い。）紺色の短い髪に黒い瞳の少し幼い風貌が印象の元気な子だ。

「湮。もう交代でいいの？」

「班長こそもう三日も休んでいないじゃないですか。あとは任せて下さい。」

と湮は無い胸（揺れない震源地）を張った。

「ならお言葉に甘えて……そちらの方は？」

私は和服を着た短い髪の少女へ目を向ける

「稗田 阿求さん。人間です。なんでも一度班長に会ってみたいだとか。」

「初めまして、私は天道 許斐です。」

「こちらこそ始めまして。稗田 阿求と申します。今回は神界や天使達について詳しくお聞きしたいのですが……お時間の方は大丈夫ですか？」

「えっと……湮！？」

「大丈夫です班長。神様もいませんし、五日は休めるはずですからゆつくりしていつて下さい！」

「ありがと。それでは阿求さん。手間をおかけしますが、説明がてら人里に行きたいので人里に行ってもよろしいでしょうか？」

「いいですよ。急に押しかけてきたのは私の方ですから。」

と阿求は深々と頭を下げる。それにつられて私もつい頭を下げてしまった。

それを見て湮はクスクスと笑う。

「では少々不安定な空の旅になりますが、ご同行を。」

と言つて私は阿求さんをお姫様抱っここの様に抱いた。

「……湮さんといい貴方といい……天使とはこのような大胆なもので？」

「この方が私達にとって飛びやすいんです。」

私はそう言つと大きな翼を広げ、春の麗らかな空へと飛び立った。いい飛行日和だ。

私と阿求さんは人里の門の前に降り立ち門を通り抜ける。

人里は今日も人間やら人妖やらで賑わっていた。

食事をするだけなら中有の道の屋台でも出来るのだが、あそこの

屋台は地獄に行くぐらいの犯罪者が経営していると聞く。

いくら祭好きの人間が行くとはいえ私は滅多に行かない。人里の方がゆつくりと食事が出来るし、里の人達は新参者の私でも皆親切にしてくれるからだ。

「折角ですから食事でもどうですか？私は湊さんと食べてきたので貴方だけになりますか……情報提供のお礼ということで。」

「ではお言葉に甘えましょう。」

そんな話をしながら私と阿求さんは歩を進めて行く。

もちろんの事だろうが羽はしまつてある。通行人の邪魔だからだし、しばらく人里の人混みを掻き分けて行くと、大きな屋敷の前に着いた。

「ここが阿求さんの屋敷で？」

「そうです。では案内しましょう。」

私はお邪魔しますと言い、屋敷の門をくぐる。

大きな庭を歩き、屋敷の中へと入る。屋敷の中には使用人と思われる人とすれ違った。こんなに大きな屋敷なのだから当然だろう。そして辿り着いたのは畳が敷いてある和風な客間であつた。

「食事は使用人が持つてきますので少々お待ちを。では質問しますかよろしいですか？」

阿求さんは私と対面するようにちよこんと座つた。

「私の話せる範囲であれば何なりと。」

「まずは神界とはなんですか？」

「神の住む世界、言葉のまんまです。神様が作り、そこに住んでいればそこは神界と言えます。」

「神界にいる神様は一人で？」

「大体は、ただし二人や三人の場合も稀にありますね。」

「では次に天使の事についてですが……まず制服はその白いワンピースなんですか？湊さんも着てましたし。」

「そうですね。でも私達全員を纏める天使長や神様の秘書だとかは自由な服装ですね。」

「天使の寿命は？」

「ありません。ただ寿命が無くとも滅びはします。特定の条件下のみですが、それは機密事項です。」

「最後は羽についてお願いします。」

「羽は自由に生やしたりしまうことも出来ます。一応一人持つて飛べるぐらいの力があります。」

私が説明終わると阿求は一息ついた。

「大体こんなものですかね……ありがとうございました。」

「でもいいんですか？メモもとらずに。」

「記憶力だけはいいいですよ。」

阿求は苦笑するように笑う。

私もつられて苦笑していると、使用人らしき初老の男が料理を運んできた。

「では、いただきますね。」

「お構いなく。」

私は遅い昼ご飯にありつくのであった。

「それにしてもこんなにも口外していいものなんですか？貴方達の世界の事を。」

「大丈夫ですよ。こんな時の為に神様から許可は出ていますから。」

「それで貴方の神様は今何処に？」

「多分マヨヒガです。紫様が住んでいる。」

「て事は貴方は八雲 紫に面識が？」

「神界で初めて会ったのは多分私ですから。」

正確には神界への扉の前で、なのだが。

「ふむ、様付けしているのを見ますと随分とお世話になったようですね？」

「ええ……それは色々ですが。」

私は溜め息をつきながら言った。

「相当苦勞なさっているようで。」

「はい。私が仕えている方も天真爛漫な方で……紫様と同じくらい

に手を焼くぐらいですね。」

私は箸を置きごちそうさまでした。と言うと阿求もお粗末さまでした。と頭を下げる。

「許斐さんはこの後どうなさるんですか？」

「近くの居酒屋に行きます。神様の友人が経営している店です。」

「そうですか。では道中気をつけて。」

と言い頭を下げる阿求。それに対して私も頭を下げる。傍から見れば頭を下げるすぎだと言われても仕方ないくらいだ。

「それではお邪魔しました。」

私は稗田邸を後にして目的の居酒屋へと歩を進めて行くのだった。



## 崩天歌ノ二『天使の昔話』

しばらく人里を歩いて5分……私は行きつけの居酒屋の前に辿り着いた。

看板には『居酒屋 武士道』と書かれている。

確かこの店の女将は戦国時代の戦乱の中を生きていたと話していた。

今は亡霊として幻想郷に腰を据えているのだが……。

店の引き戸を引くと、昼間ながらまるで宴のように客達は酒を呑んでいた。

私がたちつくしていると、目的の人物に話しかけられた。

「あら、許斐ちゃん。いらっしやい。」

「こんにちは葵さん。」

あおい くれは  
葵 呉葉。

『居酒屋 武士道』の女将でとても気前のいい人。神様も一目置いていて、よく紫様とここに呑みに来ている。

「ふふ……やっとお暇が取れたようで。」

「はい、二週間振りでしょうかね？」

と言つて私は呉葉さんの目の前の席に座る。

ちなみに呉葉さんの前の席に座る＝一夜越し確定というのが常連客の中での習わしとしているらしい。

「いいの？こんな昼間から私の前に座つて。」

「はい……葵さんと話したい気分でしたから。」

「ならゆつくりとしていくといいわ。許斐ちゃんも常連客になりつつあるわね。」

葵さんは微笑みながらお酒を注いでいる。

葵さんは赤い瞳を持つ美しい顔立ちもそうだが、長い黒髪とボンッキュッボンッな体型を持つまさに極上の美人というべきお方である。

黒髪は後ろで結んでおり、前髪は右目を隠すように分けている。それがまた堪らないらしい（常連客のスケさん談）。

また体型に関してもこちらから見る限りでは胸はかなり大きい。また立った時に見たその体型はまさに理想ナイスバディと言つに相応しいと言われる（常連客のカクさん談）。

私が葵さんをジロジロと見ていると、葵さんは悪戯な笑みを浮かべて、あら？そんなにこの胸が気になるの？と茶化してきた。

「それは……そうですね。同性の私から見ても葵さんは魅力的ですし……。」

「そう？私は重くて動きにくいと常々思っただけだね。」

葵さんはそう言っているが、それでも私はその体型に憧れを持っていた。

常連客も葵さん目当てで来る者も多い。まあ、葵さんと話すなら一夜越しは覚悟しなければならぬのだが。

「許斐ちゃんもその内に大きくなるわ。」

そう言いつつ葵さんは徳利を私の目の前に出す。

「1000年以上も生きているのにこの先大きくなるんですかねえ

……。」

私はそう言いつつおちょこにお酒を注いで一口飲んだ。

「そういえば後ろの大きな刀はなんですか？」

「この事かしら？」

葵さんは後ろにおいてある刃渡り5尺になるだろう刀を手取る。

「この刀は私の父から譲り受けた私の宝物よ。今でもこの切れ味は落ちてないわ。」

そう言つて葵さんは刀を抱き抱えた。

「ではやはり剣の腕も相当では？」

「いや、私は刀に少し頼り過ぎな面があるから……それほどでもないわ。」

「そんなことはないわ」。妖夢の稽古をつけてくれたぐらいだもの。

「

ふと私の横から女性の声が聞こえた。

「ゆっ、幽々子様っ！？驚かせないで下さい！！」

そこには白玉楼の主、西行寺 幽々子が平然と私の隣に座っていた。

「私ならついさっきからいたわよ？貴方がこの店に入った時からね。」

全く気づいてなかった……。

「いらっしやい幽々子。一晩いけるの？」

「たまには呉葉と話したいものよ。」

「それは嬉しいわね。」 葵さんは嬉しそうに笑みを浮かべた。

葵さんは接客にも定評があり、リピーターも多いと言われる。

ちなみに私もその一人になるつもりだ。

「そういえば紫も彼の慈母神様と来るようだし。あ、焼鳥五皿と焼酎一本。」

「えっ……………？」

私は慈母神という言葉に思わず手に持っていたおちよこを落としそうになった。

「幽々子様……一つ確認したいことが……」

「何かしら？」

「神様が来るって本当ですか……………？」

「ええ、今日は自慢の天使が休暇で来るはずだから藍を連れてどうかしらっつて。」

私は頂垂れて机に突っ伏す。

「あの方は……職務もほったらかしにしておいて……。」

「あらあら？何かあったのかしら？」

幽々子様が興味を持ったように聞いてきた。

「あの人は……この幻想郷に来てから職務をほったらかしにしてぶらぶらこの世界を歩き回っているんですよ……。」

私は机に突っ伏したまま言った。

「でも紫達の話聞くようだと言ったと職務は一遍にやっているようだし、

問題ないと思うのだけれど？」

「確かに書類などの職務はそうですが……さすがに他の神が来て話をするような社交的な職務となると……私達は下っ端ですし。」

「でも以前は仕事をこなしていたんでしょ？ ストレスが溜まっていたんじゃない？」

「それはそうですね……度が過ぎます。」

私は空になった徳利を葵さんに差し出す。

葵さんは徳利を受け取ると次の徳利を私の前に差し出した。

「……確かに私が羽を伸ばしてきて下さい、って言ったんですけどもね。私から見ても働きすぎだってくらいですから。」

「休むという事を知らなかったって事ね。」

「神様って以外なところで厄介なんです。疲れ知らずですから24時間ずつと書斎に籠っていたって時もありましたし、他の神様に会う為に一週間神界からいなくなるって事もありました。話すと長くなるので省きますが、とにかく慈母神としての自覚を持つてからは職務に忠実になってしまつて……。」

「でも何故貴方は幻想郷に来てからカミサマに羽を伸ばせつて言ったのかしら？」

「人々に忘れられたからです。」

「忘れられた？」

「正直な話、慈母神としては今の神様より前のイザナミ様の方が有名でした。イザナミ様の死後は今の私が仕えている神様なんですけど……どんなに頑張ろうともイザナミ様には遠く及ばなかった。」

「それで段々と信仰が無くなって？」

「はい、特にキリスト教が大きく普及してきた時は特に。その時から神様は薄々と忘れ去られたと悟ってきたのです。しかし、忘れ去られてきたとしても慈母神としての力をイザナミ様の祀る神社に与え続けてきました。それは慈母神としての使命かそれとも自身の意志か。私には後者だと思いますが。」

私は一口お酒を飲む。

「そして紫様が私達の下に来ました。幻想郷に来ないかって。最初は私も神様も反対しましたが、ふとこの言葉が私の頭に突き刺さったんです。幻想郷は来るもの拒まず、例え天使だろうが忘れ去られた神だともね、と。その時に私は自覚しました。忘れ去られたんだあつて。本当は神様自身も分かっていた事なんですが私がこう言っただけです。もう私達がいなくともやっていける、私達がやれることはやってきた、後は他の神様に任せようって。その言葉で神様も了承してくれました。それで今に至ります。」

私は話を終えてもう一口お酒を飲む。

「忘れ去られた、か。」

幽々子様は感慨深くそう言った。

「はい……私達は1000年以上も渡ってやって来ましたが……限界だったようです。」

「でも1000年やってきたのなら頑張ったんじゃない？」

「でも……………」

「涙……拭きなさいな。十分誇れる事よ。」

幽々子様に指摘されて泣いている事に気付いた。

私は葵さんからおしほりを貰って涙を拭く。

「許斐ちゃん。貴方の神様は忘れ去られながらも前代のイザナミ様のご意思を汲んで1000年以上もイザナミ様の力を護り続けた。それって偉大な事よ？自分の信仰を気にかけず、前代の信仰を護っていたのだから。」

「そう言われてみると神様は気にしていませんでした。自分の信仰の事を。」

私は苦笑を浮かべる。

「ところで……許斐ちゃん？」

「なんしょうか？葵さん。」

「天使って元々はキリスト教の神に仕えるものだと言った事があるんだけど……何故貴方は日本の神様に？」

「それは5世紀に一度キリスト教が伝えられたからです。私達はキ

リスト教が伝わるのに合わせて日本に派遣されました。神様は私達を見てすぐに気に入ってくれました。その時から私達は仕えています。」

「不思議な話ね……日本の神に西洋の神の御使いが仕えているなんて。」

「ええ、今思うと私も不思議で仕方ありません。」

私は笑みをこぼす。

葵さんは私が笑みを浮かべたのを見ると

「さて、しんみりとした話はおしまい。後は楽しくお酒を呑んでいてね。」

「……………はい。」

私は元気よく返事を返した。

## 崩天歌ノ二『天使の昔話』（後書き）

一話、二話共に説明回になってしまったと今更ながら後悔。

稚拙な文章ですがこれからもよろしくお願いします。

### 崩天歌ノ三『世間話と噂』

私が話を終えた後は幽々子様と葵さんの会話が続いたのだった。その話の内容は世間話から白玉楼の庭師である魂魄 妖夢の事まで様々な話だった。

まあ三割は庭師についてだったのだが……。

「それが結構すばしくて捕まらないのよ。」

「ちよつと待つて幽々子。彼女は確か八目鰻の屋台をやっていたはず、なら私の下で働かせてみたいわ。食べるのには私は賛同したくないわね。」

「えゝ。なら働かせて役にたたなかったら私が食べるという事で……。」

「それならいいわ。」

どうやら二人とも夜雀の事を話しているようだ……せめて捕まらない事を祈ろう。

そういえば客が増えてきた気がする。隣の幽々子様の皿も増えているが……それぐらい増えている。いや、幽々子様の皿の方が多いか。

店員も忙しそうに急ぎ回っていた。

ちなみに店主も亡霊なら店員も亡霊。人間もいるが、亡霊の方が多いと聞いた事がある。

この賑わいだともう日が落ちかけているだろう。

「そろそろ来るんじゃないかしら。」

幽々子様はお酒を一口、もう何本目か分からない焼き鳥を一本食べながら言い、後ろを向いた。

私も後ろを向く。

すると、目の前に大きなスキマが広がった。

このスキマは間違いなく何度も見ているものだ。

「幽々子、葵、待たせたわね。」



目の前のスキマからは扇子をもった金髪の美女――八雲　紫が出てきた。

「このスキマ……いつ見ても不気味よね……便利だからいいけどもさ。」

その後が続いて赤髪の長髪と小柄な体型を持った見慣れた方が出てくる。

「こっのみくん。休暇は楽しんでる？」

間延びした声で私をあだ名で呼んでいるのが私の仕えている神様、  
出雲　魅歌様。  
いずも　みか

更に魅歌様の後には紫様の式である藍さんの姿もあった。

「三人ともいらっしゃい。三日振りかしら？」

「そうね。その時は藍がいなかったんだけど。」

紫様が答える。

「お久しぶりです。」

私は紫様と目が合い、挨拶をする。

「あら、魅歌が言っていた自慢の天使って……。」

「そう、泣く子も黙るこのみんよ。」

魅歌様は無い胸（埋といい勝負が出来るだろう）を張る。

「今までどこほつつき回っていたんですか？こっちは山の神様やら秋の神様やら厄神様やらの対応に追われて……。」

「ああ、それなら他の天使から連絡受けて紫のスキマでひとつ走り行ってきた。もう心配ないと思う。」

私は色々な意味で溜め息をついてしまう。

なんでこう魅歌様ってなんでも器用に利用して物事を進められるのだろうと常々思ってしまう。

これなら職務は完璧だ。だが……

「神様がいない時の天使への指示はどうするんです？天使長も慌てていましたし。」

「それなら紫のスキマ使って戻って指示出しておいた。ついでにお金も持ってきたし……思う存分呑みなさいな。」

「またスキマ使ったんですか!!」

私が指摘する中、紫様がまあまあと私を抑える。

「私としては神界に行けたし、魅歌が幻想郷に馴染んできているか確かめられたから問題ないわ。」

その紫様の言葉に私は渋々引き下がる。

「ウチの神様がご迷惑をおかけして申し訳ありません。」

「いやいや、気にする事はないよ。紫様の方こそ神界の方にお邪魔してしまっただようで。」

私は魅歌様の変わりに藍さんに謝しておく。

藍さんは全く気にしていないようで逆に頭を下げられてしまった。

「あれ？幽々子とこの庭師は来ないの？」

魅歌様が気分よくお酒を一口呑みながら言った。

「妖夢なら紅白にお呼ばれされてるわ。刀の事で色々聞きたい事があるんだって。」

「紅白？……ああ、紫も話していた博麗 霊夢の事が。」

博麗 霊夢……私も話だけは聞いた事がある。

妖怪退治を生業とし、異変が起きた際は必ずと言っていい程博麗 霊夢が解決に行く。そして異変に立ち塞がる者は誰であろうが容赦しないという幻想郷では多分1番有名な巫女。と湊が話していた。

「でも霊夢が刀に興味を持つなんてね……。」

「確かにあの霊夢が興味を持つのは珍しいですよね。」

八雲の主従が口々にそう言った。

でも私の頭の中にはある疑問が浮かんでいた。

「でも刀の事なら葵さんの方が知識が豊富なのでは？」

「私はそんなに詳しくはないわ。」

私はがつくりと肩を落とす。

そんな私の姿を見てから葵さんではでもね……と話を続ける。

「刀に関してはあまり関係ないかもしれないわ。」

「それはまた何故？」

「確か、風の噂では辻斬りが出没しているんだとか。」

葵さんがそう言った瞬間に幽々子様があらあらと驚いたように声を上げる。

「まさか妖夢が？確かにあの子は半人前だし侵入者は容赦なく斬る不届き者だけれども。」

「さりげなく酷い事言っているわね……。」

幽々子様の言葉に魅歌様がツツコミを入れる。

「でも妖夢がやる訳ないわ。最近は外出もしてなかったし。」

「どうやら違うみたいね。」

幽々子様の言動を読み取ったのか紫様がそう言った。

「葵さんはほとんど店にいるし……じゃあ誰が？」

と藍さんが疑問を投げ掛けた。

すると紫様が急に笑みを浮かべる。

「……多分外来人じゃないかしら？」

「「外来人？」」

私と魅歌様が揃って頭の上に疑問符を浮かべる。

「今までに辻斬りなんていなかったもの、外から来たと考えるのが普通だわ。妖夢でもなさそうだし。」「む。紫まで疑っていたのね。」

「少しだけ幽々子様は頬を膨らませる。

「でも霊夢が妖夢を疑っているのには興味があるわね。魅歌、幽々子、行ってみない？」

笑みを扇子で隠しながら紫様は言った。

「そうね、妖夢がどうしているか気になるし。」

「いいねいいね！霊夢って巫女も気になるし。」

幽々子は少し心配そうに、そして魅歌様は楽しげにそう言った。

「私は辻斬りつてのが気になるから少し調べてみるよ。おい、少し店を出るよ？」

葵さんは愛刀を手に店員の亡霊にそう言った。

「もちろんこのみんなも来るよね？休暇中だけど仕事じゃないし。」  
「どうやら一夜越しは出来なさそうだ。」

「私なら魅歌様の行くところ何処へでもお供します！」

「んもう……そんなかたつ苦しいことは言わず素直に行くと言えばいいの。」

私の頭をポカッと魅歌様が叩く。

「それじゃあ、行ってみましようか？」

そう紫様が言い、私達は勘定を済ませる。

そして私、魅歌様、紫様、幽々子様、藍さんは紫様のスキマに入るのであった。

## 崩天歌ノ四『博麗神社』

私達が霊夢という巫女が住む神社についた時には日が落ちている状態であつた。

スキマが開いたその先は玄関だったので靴を脱ぎ、巫女がいるであろう居室へと向かう。

そしてそこにいたのは紅白で腋が部分がさらけ出ている巫女服を着た黒髪の少女と銀髪で緑色の服装をしている少女がいた。

銀髪の少女の隣では半透明で丸い物が浮かんでいる。

「なによ紫。何か用？」

紅白の少女が不機嫌そうに言った。

「いやいや、うちの妖夢に辻斬りの疑いをかけているようだから様子見にきたのよ。」

幽々子様が紫様の代わりにそう言った。

「はあ？辻斬りなんて疑いかけてないわよ。てか何よこの顔ぶれは

……アンタと紫にその式、それと……誰？」

「最近幻想郷に来た慈母神の出雲 魅歌。お初目にかかるわ、博麗 霊夢。」

「初めまして、私は魅歌様の部下の天道 許斐と申します。よろしくお願いします。」

私と魅歌様は挨拶をするが霊夢はそれだけ聞くと興味が無いように私達から視線を外す。

それに対して魅歌様は少しムツとしたようだがなんとか抑えたようだ。

「それで？妖夢にはなんの用が？」

紫様が言った。

「辻斬りが現れたつてのは知っているみたいだから辻斬りの説明を省くけども、アリスがやられたわ。」

「あの人形使いが？」

紫様が驚いた様子もなく答える。

「アリスの目撃情報だと髪は白髪で刀を持っていたと聞いているわ。」

「ほら、疑ってんじゃない。」

幽々子様が霊夢に対して少し憎ったらしい様子で言った。

「だからもう疑ってないっての。この庭師から事情は聞いたから。」

霊夢は幽々子様をキツと睨む。

「そもそも庭師を疑っていたのはもしかしたらの話だったのよ。目撃情報と妖夢とじゃ矛盾があっただんだから。」

「矛盾？」

「そもそも庭師の髪って白髪というよりも銀髪でしょ？それに目撃者はなにもアリスだけではないもの。他にも目撃情報があって犯人はその庭師かどうか分からなかったの。でも念のために聞いておこうと思って呼び出したの。」

霊夢は不機嫌そうに湯飲みのお茶を飲む。

「でも違ったってことは紫様の外来人が来たという線が強くなりましたね。」

「はあ……外来人って見境もなく幻想郷の秩序を乱すから困るわ。」

藍の言葉に霊夢が溜め息をつく。

「それには同意するわね。」

紫様が霊夢の言葉に賛同する。

そういえばこの世界を1番愛しているのは紫様だったっけ。やっぱりこういう事件には敏感なんだろうか。

「ともかく私も動こうと思う。友人もやられたし、これ以上面倒なことになるのもごめんだしね。」

「そ、なら安心ね。」

霊夢の言葉を聞いた紫様は表情を少し緩める。

「じゃあ妖夢は返して貰うわよ？」

「ん？ああ、いいわよ。もう用は無いし。」

そして妖夢と呼ばれる銀髪少女は幽々子様の下に行き一礼する。

「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。」

「いいのよ、それよりも……。」

扇子で少し隠しているようだったが、幽々子様はいつになく真剣な表情をして言った。

「辻斬り、妖夢も探して捕らえてきて頂戴。」

「辻斬り……ですか？」

「そう、このまま野放しにしておく和人里にまで影響が及ぶわ。私としても人の惨殺風景は見たくないしね。」

「何人も惨殺となると辻斬りというより殺人鬼だけだね。」

魅歌様も事の深刻さを理解してきたためか真剣な眼をしている。

「承知しました幽々子様。この魂魄　妖夢が辻斬りを捕らえてみせます！」

妖夢は意気盛んに答えた。

……ここは私も出るべきだ。いつも親切にしてくれる人里の皆さんを危険に晒したくないし、それに人手が多いことに越したことはない。

「魅歌様、私も「待つて。」

行きます。と言おうとするのを魅歌様が遮る。

「このみんな人里に戻りなさい。」

「人里に？」

「里の人達を護るの。」

その魅歌様の言葉を聞いてか紫様が

「なら藍と橙も人里の警護にあたらせるわ。許斐一人では大変そうだし、人員が多いことに越したことはないわ。」

「紫………ありがと。」

魅歌様は紫様に対し笑顔を見せる。

「笑うのは辻斬りに勝った時よ。」

「ええ、なら始めましょうか？辻斬り退治。」　魅歌様の言葉を聞き、その場にいる一同は心をついにし、博麗神社を後にしたのだった。

人里に着くと人々はもう寝る準備を整えていた。

ただ、葵さんの居酒屋や他の居酒屋ではまだ終わりを見せない宴をやっているだろう。

今のところ人里の警備は私しかない。

藍さんは橙と呼ばれる藍さんの式を呼びに行くとかで一度マヨヒガに帰っている。

一応念のために里の警備をしているのだが、私としては人里に来てほしくない。

相手は外来人。人里に置けるルールも知らないだろう。

今は一人だから里を西へ東へと目を光らせているのだが、もう里の中に侵入しているのならば非常に厄介である。

もしそうなった場合は私は下手に戦えない。

里の人々に変わらない明日を迎えさせるために。

そういったことを考えていると人里の中央で藍さん、湊、そして猫耳のついた少女と合流した。

「湊？どうしてここにいるの？」

「神様に頼まりました！事情は神様の方から聞いていますっ！！」  
元気に敬礼をしながら答える湊。

きつと魅歌様が気を利かせてくれたのだろう。

そして私は猫耳の少女へと視線を向ける。

猫耳の少女と視線が合うや否や猫耳の少女は藍さんの後ろに隠れてしまう。

「ああ、この子は橙と言ってな、私の式だ。ほら橙、挨拶しなさい。」

「よ、よろしく願いしますっ！！」  
と言って一礼する。

緊張のためか声が裏返ったようだが気にしないでおく。



「よろしくね、橙ちゃん。」

「よろしく願いますっ!!」

私と湊も挨拶。

挨拶が済むと藍さんは配置を決めた。

藍さんが北。湊が南。橙ちゃんが西。そして私が東だ。

「一人で大丈夫なのか？橙。」

「で、出来ます！私も誇り高き藍様の式なんですから!!」

「よろしい。」

藍さんが橙ちゃんの頭を撫でてあげた後、橙ちゃんは西へと向かった。

私と湊もそれぞれ東、南へと向かった。

## 崩天歌ノ五『月夜の下で』

月は今宵も暗い人里を照らし続けていた。

東にある人里の門の上空で警備を続けていた私はふと夜空を見上げていた。

この空は神界を隔てていると聞く。

つまりはこの空を斬るか割るかすれば天門を使わずとも神界と地上が繋がる事になる。

ただ、この空を斬るか割るなんて荒業をする神界の住人は1000年以上も生きた私でも一回しか聞いた事がない。

ましてやそんな事をすれば重罪だ。確か神界の掟の中にそのような旨があった。

そして実際に空を斬った天使は神界永久追放と神界で得た力・権限を全て神様に奪われた。

今その天使の力は魅歌様の中にあると思われる。

いつだかその力を魅歌様が使っていた。もちろん空を斬る為ではない。

そんな事を考えていると私の目に一人の少女が仰向けに倒れていた。

服はボロボロで頭や脚や腕には包帯を巻いており、白髪の長い髪が月光によって輝いていた。

私は地上に降り立ち、その少女を起こす。

「大丈夫ですか!？」

私が声を掛けると、少女は力無く瞼を開けた。  
そして青い瞳が私を見つめる。

「つ……辻斬りが……私を……追いかけてきて……。」

「辻斬り!？」

私はその言葉を聞き、私の体中に戦慄が走る。

私は静かに少女の体を起こした。

「立てますか？」

「は、はい……なんとか……。」

よっぽど逃げ回っていたのだろうか少女はなんとか立つことに成功する。

「住んでいる所は？」

「分かりません。」

「分かりません……かあ……。」

私は頭を抱える。

ふと私の頭の中にこんな言葉が浮かんできた。

『外来人』と『白髪』。まさか……

そう思った時には遅かった。

「感情とは顔に出るものですね、天使さん。」

いつの間にか少女が私の背後に立っていた。

「ッ………！？」

私は声にならない程の痛みを胸からお腹にかけて感じていた。

「辻斬り………！！」

「ご名答。」

白髪の少女は笑顔でしかし残酷な笑みで私を見ている。

「その手………どういう事なの……。」

「ああ………この手のことですか？」

少女は刀の刃を模した右手を見る。

「便利でしょう？ 私は人間じゃないの……。」

「じゃあなによ。」

「九十九神。刀のね。」

九十九神。古くなった物や生き物などに宿る神や霊魂………これはまた厄介な敵だ。

生け捕り………出来るだろうか。

そして私は指をパチンと鳴らすと地面に亜空間が開き、そこから私の武器である大鎌が出てきた。

「それでこの私を倒すというの？」

「倒さない……生け捕りにする。」

私は大鎌の柄をしつかりと両手で握った。

「不快だわぁ……………」

それだけ言うと少女は動きだした。

今度の攻撃は空気を切る音と少女の気配でなんとか防ぐ。

そしてしばらく少女の右手の刃と私の大鎌の柄での鏝ぜり合いが続いた。

「…………その程度？」

「ちいっ!!」

私は挑発されたが、なんとか怒りを抑える。

そして冷静に少女の体を狙うとそれを振るう。

しかし少女は右手の刃で攻撃を受け流し、そのまま私の懐へと入ると私にもう一太刀喰らわせた。

「っっ……………!!」

私はなんとか痛みを堪えたが少女の鋭い蹴りで私はいとも簡単に吹っ飛ばされた。

「私はねえ…………九十九神でもおっても強くておっても偉ーいの。だからどこぞの神に仕えている天使なんか私を生け捕りにするなんて無理、無謀よ。」

少女はケタケタ笑いながら不様に倒れている私を罵倒する。

こうなったらしかたないか…………。

「無理?…………いいえ、出来るわ。」

「そう…………そんな不様な戦い方でねえ…………。」

少女は油断している。これなら…………。

そして私は全神経を集中させる。

「不様?…………あなたもよ?」

「悪いけど、どうみても私の方が…………!!?」

すると刃であった少女の右手が元に戻る。

やっと気付いたか。

私の能力である《干渉する程度の能力》に。

この能力は相手の体内に私の力を送り込み、相手の魔力、妖力、そして神力の源を短時間断つことが出来る。

問題としては私も天使としての力を短時間使えない。

つまりは身体能力だけで戦う事になる。

私は大鎌を構えて少女に向かって横に振るった。

「へえ……中々厄介な力ねえ……………」

少女は跳んで避けた。

私は一旦間合いをとるため交代した。

私は使う武器が大鎌故か近距離よりも中距離の方が戦いやすいのである。

とここで少女が着地すると、素早く私に向かってきた。

私はそれを迎え撃ちに行く。

すると既に相手の力が戻っていたのか右手は刃に戻されていた。

「さすがに早いかな」

「言っただけでしょう？……私はとっっても強いってねえっ！！」

すると少女は力付くで私を押し切った。

「しまっ……………」

「甘かったねえ。」

ドスッ

私は腹部にとても熱いものを感じていた。

「あ……………」

「あなたは所詮天使よ。まあ、死にはしないからせいぜい苦しみなさい。」

そして少女は私の腹部から右手の刃を抜く。

すると私の腹部から悍ましい量の血が出る。

正直もう倒れそうだったが、まだ堪えている。

「まだもがくの？」

「うう……………はあ……………人里には……………はあ……………行かせないっ……………！！」

私は気力を振り絞って大鎌を振るった。

しかしそれは空を切るだけで私はそのまま倒れてしまった。

「よく頑張ったわ、天使さん？このまま抱きしめてあげたいほど愛  
おいしい姿よ？今のあなたは。」

少女は座り込んで私の顔を覗き込む。

少女は無垢でそして残酷だった。

「あなた……気に入ったわ……名前を教えて。」

「はぁ……はぁ……。」

私は痛みを堪えるのに必死であった。

「教えてくれないと……非道いよ？」

少女は右手の刃の切っ先を私の首筋に当てる。

冷たい刃が私の首に少しずつ刺さる。

「ひっ……。」

私は恐怖を感じた。

怖かった、ひたすら。

「仕方ないなあ……なら声上がるように痛くするね？」

少女が私の首筋に刃を少しずつ入れ始めている時であった。

「そこまでよ。」

「だあれ？……。」

私は首筋に刃を刺されているため無闇に動かせないのだが、この  
声は……！

「あ………おい………さん？」

首筋から刃が抜かれたため、私は葵さんの名を口にする。

「もう大丈夫よ許斐ちゃん。私が来たからには。」

葵さんの長い太刀が既に抜かれている。

「フフフ………あなたは愉しませてくれて？」

「なめた口を……。」

そしてそのまま交戦に入るのであった。

## 崩天歌ノ五『月夜の下で』（後書き）

はてさて遅れて投稿完了しましたっ！

そのため今日は二話分投稿しております。

また誤字・脱字・感想等はコメントにて受け付けております。

これからも崩天歌をよろしく願いますっ！

## 崩天歌ノ六『辻斬りの終末』

葵さんと九十九神の少女……その戦いはまさに一進一退の攻防であつた。

葵さんが攻めていると思いきや少女がすぐに切り返し、逆に少女が切り返してくるならば葵さんが切り返していた。

ふと少女の方を見ると、少女の顔から笑みが消えていた。

「そんな長いだけの太刀で……」

「そんな短い刃で……」

「勝てると思つているの!?!」

今度は鏑ぜり合いが始まる。

「許斐ちゃん、敵は取らせてもらつ。」

「そう……あの子はこのみというの……悪いけど気に入ったものは貰う主義でねえっ!!」

少女が力付くで行こうとしていたが……

「力押し……なめているのかしら?」

葵さんは逆にその力押しを受け流して足を引つ掛けた。

そして少女は地面に勢いよく転んだ。

「冷静さを失つたわね……それが敗因よ。」

葵さんが刀の切っ先を少女の首筋に当てる。

「ふっ……」

「ふ?」

「フフフフフフフ……アッハハハハハハハッ!!」

「何が可笑しくて?」

葵さんは身構える。

私もなんとか大鎌を杖にして立ち上がった。

「凄い……凄いや。私をここまで追い詰めたのは貴方だけよ……?」

「そう。」



喜ぶ事もなく葵さんは短く答える。

しかし少女がここまで追い詰められても笑っているのは何故だろうか。

「なら……本気、ださなきゃね？」

「ッ!？」

そう言つと少女は葵さんの刀を弾き、そのまま消えた。

「後ろっ!！」

私がそう叫ぶ。

そのお陰か葵さんはなんとか防いだ。

今度は右手だけでなく左手にも刃を模していた。

それだけではなく、少女の背後には何十本もの刀を浮かべていた。

「何よ……これ……。」

「驚いた？」

葵さんの驚愕の顔を余所に少女は再び笑みを浮かべた。

「全部私が拾つてきた私の可愛いこちゃんよ。」

「か、かわいこちゃん!？」

「そう。でも許斐ちゃんの方が素敵だけどね？」

そう言つて私の方を見た。

どういつつもりなのだろうか……？

「まったく……人間共が廃刀令やらをださなければこの子達は捨てられずに済んだのに……。」

少女はどこか悲しげな表情をしながら話す。

「貴方は捨てなかつたみたいね……その刀、きっと喜んでいるわ。」

「喜ぶねえ……。」

そう言つて葵さんは刀を見つめた。

「フフツ……それじゃあ刀もろとも眠ってもらつわ……。」

「それは遠慮しておくわ。」

「遠慮しないでよ……せつかくの計らいなんだからさあつ!！」

そう言つて少女は右手を前にだす。

すると背後の刀が一斉に葵さんに襲い掛かる。

しかし葵さんはそのまま刀に向かっていく。

「葵さん!？」

「馬鹿ね……………!!」

そして刀は葵さんを貫い……………ていなかった。

葵さんはそこにいなかった。

「なにっ!!」

少女は気付いていないだろうが、横から見ていた私には見えていた。

「スキマ……………?」

そう呟いた瞬間に少女は切り裂かれていた。

「へ……………?」

少女は訳が分からないまま倒れた。

「ふう……………」

葵さんは一息つき、私の所へ来る。

「なっ……………何があつ!!この私が!!この私があつ!!」

少女は斬られた事に対して驚きを隠せないでいるようだ。

それもそのはずだ。なぜなら……………

「この子が辻斬りか。」

紫様がスキマから登場して少女の前に立つ。

「お……………お前は!？」

「八雲 紫……………ただのスキマ妖怪よ。」

ただのスキマ妖怪ではないのだが……………と私は心の中で突っ込む。

「悪いけどこれ以上被害を出すわけには行かなかったの。」

「……………だから私を?」

「そうよ、私の友人もやったそうじゃない?」

聞いたような声がすると思いきやいつの来たのか霊夢が少女の前に立っていた。

「霊夢……………もう退治は終わっているわ。」

「分かっているわ。」

そして霊夢は少女を見下すようにして言った。

「貴方には悪いけど、この幻想郷の均衡を保つのは私の役目よ。これ以上人を斬るつもりなら九十九神と言えど容赦はしない。」

「くっ……………」

少女はこの人数差には勝てないと判断したのか大人しく体を起こした。

「分かったよ。もう人斬りは止めるよ。」

「そう。それならいいわ。」

霊夢はそれだけ言うと言と紫様と少し打ち合わせした後に飛んでいった。

人斬りの犯人が観念したからだろうか？

「さて、どうしようかしらねえ……………」

「わ、私をどうするつもりっ!？」

「そうねえ……………」

紫様は少し考える素振りをする。

「好きにするといいわ。ただし斬った人には謝りなさい。」

「わ……………分かった。」

紫様は頷くと私達の方へと歩いてくる。

「これで解決……………ね。」

「ありがとね紫。」

葵さんは刀を鞘に収めて言った。

でも紫様のことだ、もしかしたら……………

「でも紫様はいつからいたんですか？」

「ん？許斐があの子と戦ってからよ。」

「やっぱり……………」

私は溜め息をついてしまう。

「危なっかしいたらありやしないわ。」

「なら助けて下さいよ!!」

「それは葵が来るのを分かっていたからよ。私はあまり戦闘はしたくないしね。」

「うぐっ……………」

紫様らしい答えであつた。

「じゃあ、あの子は頼むわよ。」

「ちよっ…………… どういう事ですか!?!」

しかし私の抗議は虚しく月夜に響くだけだった。

「どうしましょう。」

「うーん、どうしましょうかねえ?」

葵さんも困つた顔をしている。

「許斐……………」

ふと後ろから声が聞こえた。

「え? あ、あの……………」

「<sup>やいは</sup>刃 <sup>きりか</sup>霧華よ。霧華って呼んで?」

「じゃあ霧華さん。どうしたんですか?」

「私は…………… 許斐についていく。」

「へっ? ええっ…………… ええええええええええっ!」

驚愕の提案であつた。

「で、でも住む所は。」

「別にいいわよ。」

「魅歌様!」

いつの間にか魅歌様、幽々子様、妖夢の三人がいた。

「でも神界には神は一人のはず……………!!」

「客人としてなら問題ないわ。」

「で、でも……………」

「見捨てるの?」

その魅歌様の言葉に私は反論できなかった。

「じゃあ……………」

「いらっしやいな、我が慈母神の世界に。」

「あ、ありがとう!! やつたよ、許斐!!」

何故か霧華さんは私に抱き着いてきた。

「き、霧華さん!」

「霧華でいいのっ!!」

「じゃあ霧華っ！とりあえず離れて……」

私の傷口はさらに開いていた。

「あらあら……」

「羨ま………じゃない！！このみんなから離れなさい！傷口開いているから！」

「フフッ……お盛んなのね。」

「盛ん、とはいいい切れないようですけどね。」

葵さん、魅歌様、幽々子様、妖夢が各々そんなことを口にした。

「見てないで助けて下さあい！！」

辻斬り事件はこうして幕を下ろしたのだが、まだ事件は全て終わってはいないのであった。

余談だが、私が霧華から解放されるたのは私が失血で倒れた後だという。

## 崩天歌キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です。

作中では能力の描写が書かれていないキャラの分もありますが気にしないかたはこのまま進んで下さい。

## 崩天歌キャラ紹介

### 【天道 許斐】

(てんどう このみ)

・種族：天使

・年齢：約1800歳

・能力：「他人に干渉する程度の能力」

### 《補足》

この物語の主人公。

長い黒髪に茶色の瞳を持つ。外見は17歳前後。

魅歌に仕える天使の一人で位階の低い天使を指導出来る天使班長。敬語が多いが、後輩や気を許した同じ境遇相手なら普通に話す。

とある事情により他の古参の天使からは敬遠されがちだが同じ班の天使からの人望は厚い。

魅歌は許斐を自慢としており、許斐は魅歌を信頼している。だが魅歌には振り回されること多々あり。

武器は大鎌。

能力は対象の能力を上げたり下げたり出来る。また、相手に精神攻撃や相手の体に乗っ取るなど恐ろしい力を秘めている(魅歌談)が、本人はまだ力の制御に手こずっている模様。【桃園 湮】

(ももぞの かいり)

・種族：天使

・年齢：約150歳

・能力：「土気を操る程度の能力」

### 《補足》

許斐と同じ班の新人(年齢約150歳であるが……)天使。

黒い短髪と紺色の瞳を持ち、また常にホイッスルを所持している。外見だけで見るなら14歳前後か。

許斐からは元気で明るい真面目な子、そして魅歌からは元氣過ぎ

のドジっ子と評されている。

武器は持っていない。

能力については敵、味方の士気を上げたり下げたりする能力。  
ちなみにこの能力はホイッスルを吹かないと発動できない。

【出雲 魅歌】

(いずも みか)

・種族：慈母神

・年齢：約1800歳

・能力：癒す程度の能力

《補足》

許斐、湮の仕える神様であり約1000年に渡って前代イザナミの信仰を守ってきた。

長い赤髪と赤い瞳を持つ。外見でいうなら12歳前後で湮よりも身長は低い。

本人に対しての信仰が無くともイザナミに対しての信仰があれば神力は持続出来る。

幻想郷に来るまでは職務に没頭していたため幻想郷に来てからは遊びまくっている。ただし勿論のこと職務はこなしている。

能力についてはあらゆる傷（物理的、精神的共に）を癒す能力。

その効果は絶大で斬り落とされた腕もくっつけて魅歌が能力を使えば半日で治ってしまうほどである。

【葵 呉羽】

(あおい くれは)

・種族：亡霊

・年齢：約350歳（享年27歳）

・能力：ありとあらゆるものを封印する程度の能力

《補足》

『居酒屋 武士道』と呼ばれる居酒屋の店主。

長い黒髪と赤い瞳を特徴とする気前のいい人。

戦国時代に生まれ、病気で死んだと言われているが、真意は不明。



刃渡り5尺（約151.5cm）にもなる長刀を愛刀としている。  
能力はありとあらゆるものを封印する程度の能力で、彼女が亡霊  
でありながら居酒屋を経営できているのはこの能力のお陰だとい  
う。ただしこの能力は従業員や他にも封印しているものがあるため  
少々弱くなっている。

### 【刃 霧華】

（やいば きりか）

- ・種族：刀の九十九神
- ・年齢：約130歳
- ・能力：物を取り込む程度の能力

### 《補足》

刀の九十九神。

姿は16歳前後で白髪に青い瞳を持つ。

本人の言葉通り九十九神の中でも高位にあたる。

許斐に一目惚れし、許斐を傷つけようとする者、むしろ敵として  
立ちはだかる者は容赦しない。

ちなみに許斐以外にはあまり興味を示さないため許斐には心配が  
られているが、本人は気にしてない。

能力については物を取り込む、つまりは刀だろうが桶だろうが木  
材だろうが自分の力として取り込むことが出来る。

ただ本人が刀だけを愛しているためか刀しか取り込まない。

## 崩天歌ノ七『事件の事後処理』

辻斬り事件は終わってはいない。

翌日、霧華は被害者の人達へ謝罪をしなければならなかった。

そして私は監視役として同行している。

ちなみにあの事件が収束した後、湊は通常の職務に戻り、藍さんは橙ちゃんと共に紫様の下へと戻って行った。

「ところで霧華？」

「なに？許斐の言うことなら何でも聞くけど？」

「それじゃあまずは腕を組むのをやめようか。私、まだ傷が治っていないんだからさ。」

そう、霧華は昨日の一件以来ずっと私の後について来た。

ちなみに怪我の看病も霧華がやっていたそうだ。

魅歌様はその時の様子を見ていたそうだが、それを言うのをかたくなに拒み続けた。後で霧華本人に聞いたですとしよう。

さて最初に着いたのは魔法の森である。

道中では動くキノコや白黒の魔法使いなどにすれ違った。

そして着きましたのはアリス邸。

アリス・マーガトロイドに関しては、私は何度も会っているため問題ないだろう。

ただ霧華がアリスに許されるか、はたまた霧華が謝らないか。

私の中ではその二つの考えが入り混じっていた。

「許斐？どうしたの？早く入る？」

「あ、ああ……そうだね。」

私はいつの間にか長考していたらしい。

私がドアをノックすると、家から出てきたのはアリスではなく紅白の巫女さんだった。

「博麗 霊夢……？」

「そうよ。いては駄目かしら？」

「いや、それは構いません。アリスはいますか？」

「アリスなら起きてるわよ。なに？お見舞い？」

「それも兼ねて。本来はこの子に謝罪をさせるのが目的ですが。」

「ふーん、とりあえず入りなさい。」

私と霧華はアリス邸へと入る。

人形達は主が寝込んでいるせいか大人しい。

唯一動いているのは上海人形だけだった。

私はアリスのベッドの前にあつた椅子に座る。

「あら、許斐じゃない。どうしたの？」

「お見舞い。それと謝罪。」

「謝罪？なんでアンタが……ってまさかソイツを連れて来たの？」

アリスが霧華を見て驚いている。

さすがに友人が加害者を引き連れてきたらそれは驚くにきまつている。

「そ、アリスも分かっているだろうけど辻斬りはこの霧華って九十九神。ほら、謝りなよ。」

私は霧華の方を向く。

霧華はアリスの前に立つと

「ごめんなさい。」

と一言。

おお、霧華が謝った。

あとはアリスが霧華を許し……

「大丈夫よ、傷は浅かったし。」

以外にあっさりと済んでしまった。

「へ？え？」

「何よアンタ、この九十九神が謝ったんだから驚くことはないですよ？」

霊夢が驚く私を尻目にそう言っただけで紅茶を飲む。

巫女が紅茶が飲むという光景は新鮮だった。

それはさておき

「アリスは斬られたんでしょ？ならそんなにあっさり許していいの？」

「いや、そんなに深くないわよ。パチュリーの作った薬で少しは楽になったわ。」

「ああ、紅魔館の。」

私は紅魔館の地下図書館にいる紫の魔女を思い浮かべた。

そういえば紅魔館にも行かなければならない。

霧華が言うには紅魔館に侵入して、妖精メイドを斬ってきたらしい。

ちなみに主である吸血鬼のレミリア・スカーレットとも交戦したらしいが押されっぱなしで、しかもメイド長が援護に来たから逃げ出したという。

紅魔館は最後にしよう。それと身を護る用意もしておかないと。

「んで見舞いの品は？」

霊夢が紅茶を注ぎながら言ってきた。

「こら霊夢、見舞いの品をせびるな。そして紅茶を淹れながら見舞いの品を食べるな。」

「どうせ食べないでしょ？なら早めに食べておかないと。」

霊夢は見舞いの品であるケーキを食べている。

それにしても、この巫女は西洋の菓子が好きなのか？

「たく……で結局持ってきているの？」

「見舞いの品は無いわ。けど……」

私はアリスの額に手を当てて体内に干渉し、怪我の痛みを和らげるように力を送る。

「ん、まあこんなもんよね。」

私は額から手を離す。

すると霊夢が不思議そうに聞いてきた。

「なにしたのよ。」

「私の能力使って怪我の痛みを和らげるように促しました。」「怪我を治すのではなくて？」

「それは神様の能力ですから。」

私は苦笑する。

「別に治さなくても気持ちが悪わってくるからそれでもいいわ、ありがと。」

「いえいえ。」

ここで私は椅子から立つ。

「あら？もう行くの？」

「他にも行かなければならない所があつてね。」

「そう。道中気をつけてね。」

「アリスこそ無理しないでよ？」

私は霧華を促してアリス邸を後にした。

次の目的地は永遠亭。

道中の迷いの竹林は案内人として妹紅を選択。

久しぶりの再開に妹紅は嬉しそうであつた。

ただ、霧華はどういう訳か道中で妹紅を睨みつけていた。できれば私以外にも目を向けた方がいいのだが。

「んじゃ、いつでも私なら案内するから。」

「ありがとね妹紅。」

私は妹紅を見送った。

そして私達は永遠亭の玄関の前に立つ。

すると玄関から兎が一匹出てきた。

「やあやあ天使さん、ご機嫌いかがかね？」

「てゐ！？」

そこにいたのは因幡 てゐだった。

私は二度くらい永遠亭に来ているので、てゐとは面識があった。ついでにいうと私はてゐの仕掛けた罨に一度引っ掛かっている。

「まーた罨でも仕掛けにいくの？」

「ご名答！許斐はどうしたの？」

「今日は永琳先生に用があつてきたの。」

「師匠に？なに？急患なの？」

「ほら、例の辻斬り事件について。」「あー……その話題なら出さない方が身のためだよ。師匠は現在進行系で気が立っちゃってるし。」

「解決したから報告に来たの。」

「そ、なら師匠と鈴仙には罨のこと黙っててね。あ、今入っても大丈夫だから。」

と言つて元気に外に飛び出す。

罨を仕掛けるとかしているが、あれでも私より年上だから困る。

「霧華、永琳先生は気が立っちゃっているから言動には気をつけてね。」

「はい。」

霧華は間の延びた返事を私に返す。

いくら霧華が謝りにきたとはいえ永琳先生は気が立っている。そのことに一抹の不安を感じつつも永遠亭に入ってしまった。

崩天歌ノ八『永遠亭と事件』（前書き）

のんびりしていたら予想以上にかかってしまった……お待たせしま  
って申し訳ありませんでした。

## 崩天歌ノ八『永遠亭と事件』

現在永遠亭にいるわけだが、どういう訳か永琳先生が見当たらない。

まさかてゐに騙されたか？と思ったのだが、それは考えるだけで無駄だと私は結論付けた。

玄関にもどると永琳先生ではなくもう一匹の兎を見つけた。

手には買物袋を持って来ているので買い物から帰ってきたというところか。

「おかえり鈴仙。」

「あ、久しぶり！今日はどうしたの？」

私はてゐと面識あれば鈴仙とも面識ありだ。

「永琳先生を探しているんだけど……」

「師匠？師匠なら姫様の所じゃない？」

それは盲点だった。

「そっか、なら輝夜の所に行ってみるよ。」

「話題には気をつけてね。下手するといくら師匠でも襲い掛かってくるかもしれないから。」

私は質問に手を振って答える。

話題に気をつける、ねえ……。

私と霧華は輝夜の部屋の襖の前に立っていた。

「霧華、私に任せておいて。永琳先生と面識ある私なら下手はうたない。」

それに永遠亭の姫様とは段幕ごっこをやりあう仲、そし「その呼



び方は……入ってもいいわ。」

「では失礼します。」

私と霧華は襖を開けて中へとお邪魔する。

中には永琳先生、そして表情が固まっている輝夜がいた。

「どうしたの？ 今日診療の用事で？」

「いえ、辻斬り事件のことで……」

すると霧華は即座に倒されて永琳先生に弓矢を構えられる。

「ありがとね許斐さん。犯人を私の前に連れ出してくれるなんて。」

「……どうして分かったんです？」

「大体の算段は私もついてきていたわ。そして私はさっき特定出来たの。この外来人だって。」

どうやら本気で辻斬り事件に関して怒りを覚えているらしい。

私は弓矢を構える永琳先生を制す。「別に霧華……この子を殺す為にここに連れてきた訳ではないんです。」

「じゃあ、何をしに？ 答え次第では頭に風穴が空くわよ。」

永琳先生は私に弓矢を向けた。

「謝罪です。」

「謝罪？」

「この子は魅歌様、紫様、その他葵さん達の力を借りて懲らしめました。もう辻斬りまがいなことはいないとこの子は言っています。」

永琳先生は厳しい目つきで霧華を睨む。

「まあいいわ。過ぎたことは仕方ない。」

「しかし何故そんなに憤慨を？」

「辻斬りのせいで建物と兎が十匹、作り置きしていた薬が七瓶に鈴仙と姫様が傷付いたわ。」

「輝夜まで……？」

「ええ、私が永遠亭を離れている間に起こったのよ。」

「ひどい偶然ですね。」

「ええ、本当に。」

しかしなぜ霧華は永遠亭に辿りつけたのか疑問であった。

「ただなぜ辿りつけたのかしらね？その子。」 ちょうど同じ考えをしていたのか永琳先生が霧華へと弓矢を向ける。

「兎……………」

「兎？」

「さつき出会った鈴仙っていう兎よ……………あの子が案内してくれた。」  
心做しか霧華の表情が強張っていた。

永琳先生は怒るとんでもなく怖いと人里でよく会う鈴仙から聞いたことがある。

事実輝夜が霧華と同じような表情をしているからだ。

「本当に？」

「は、はい。私はあの兎をつけていたの。そしたらここに着いて…

…」

「なるほど……………」

と何故か永琳先生は弓矢を降ろした。

「じゃあ一つだけ聞かせてもらうけど……………」

「はい。」

「辻斬りしていた時の記憶は残ってる？」

私は意表をつかれた顔になってしまった。

私達は霧華の証言を元にこうして廻っている。

覚えているに決まって……………」

「うつすらとしか覚えていない。」

「ええっ！！」

私は驚きを隠せず、つい声をあげてしまう。

「本当よ許斐……………私が覚えているのは『人形と人間』『兎と竹林』

『紅とメイド』だもの……………」

たしかに私はその言葉を元に特定した。

まさかそれしか覚えていないとは……………」

「……………どうやらこの子は灰色ね。」

永琳先生は落胆する。

「実行犯はその子だけれどもどうやら裏で操る奴がいるようね。」

「黒幕かあ……………」

事件は解決していなかった。

つい私も溜め息を漏らす。

「永琳先生はどこまで目星をつけてたんですか？」

「犯人がその子までよ。だけど黒幕の出現によって狂ったわ。まだ事件は終わってはいない。」

どうしたものかと私と永琳先生は物思いに耽る。

霧華は操られていた。

しかしこれまでの言動からして何処までが操られていたのだろうか？

「霧華、どこまでなら思い出せるの？」

「……………」

霧華は沈黙していた。

「霧華？」

「そ、その……………」

と私に耳に顔を近づけて耳打ちしてきた。

「こ、許斐を刺した時よ…………その…………それから許斐に一目惚れして……………」

何故あの時に一目惚れしたのかが解せない。

「どうしたの？こそこそ話して。」

「いえ、なんでも。」

永琳先生はしばらく私の顔色を窺っていたが、しばらくすると弓矢を持って立ち上がった。

「もう一度私は辻斬り事件を調べる。許斐も魅歌つてのや八雲に伝えておいて頂戴。」

「分かりました。」

私がそう言うと、永琳先生は輝夜の部屋を出て行った。

私は輝夜の方を向く。

「…………何をボーンとしているの。」

「え、えーりんが…………あんなに怒りを顔わにするから……………」

「ああ、それで。」

私は立ち上がって輝夜の隣に座る。

「……で、斬られたのは本当？」

「え、ええ。いつもの段幕ごっこかと思ったら急に襲って来るんだもの。驚いちゃったわ。」

「ふーん、珍しいわね。輝夜が斬られるなんて。」

実は輝夜とは段幕ごっこを三戦ぐらい交えたのだが私は全敗している。

だから輝夜の強さは分かっていたのだが……

「私が最強じゃないんだから……まあ、かすり傷だったからえーりに薬を塗って治したわ。」

「いくらなんでも回復力ありすぎね。」

かく言う私も人のことを言えないのだが……。

「どうせなら今からでも段幕ごっこやってく？ 私は余裕だけど。」

「私の方が無理ね。」

斬られてもなお余裕な姫様なのであった。

## 崩天歌ノ九『紅魔館』

私は霧華を連れて永遠亭を出た。  
帰り道は鈴仙に送ってもらった。

今はその鈴仙にお礼を言い別れた後、紅魔館を目指していた。  
気づけば日は沈みかけていた、永遠亭に長居していたようだ。

霧華と言えば、永琳先生との一件ですっかり疲弊している様子だった。

「許斐、本当に行くの？」

「行くに決まっているでしょ？事件が解決してないんだから。」

別段急ぎという訳でもないが謝罪と聞き込みは出来るだけ早く済ませたい。

ましてや相手が吸血鬼ならなおさら昼間に行うわけにはいかないのだ。

そして霧の湖と呼ばれる湖に着く頃にはすでに夜になっていた。

今は霧は発生しておらず、紅魔館はすぐに見つけることが出来た。  
霧華はもちろんだが、紅魔館は私にとってもあまりいい思い出がない。

レミリアには弄ばれ、言うことを聞かなければメイド長のナイフが頬をかすめ、挙げ句の果てにはレミリアの妹であるフランと遊びと言つ名の殺し合いをさせられたのだった。

どうも私は向こう側に気に入られたらしい。

私にとっては悩みの種になるのだが……

そうこうしている内に紅魔館の門の前に降り立っていた。

門番の美鈴さんは相も変わらず目を閉じたままである。

「美鈴さん、起きないと咲夜さんに刺されますよ。」

私は、まるで春告精のように私は美鈴さんと呼び掛けた。  
それでも起きないので私は続ける。

「門番クビになりますよ」それとも咲夜さんに刺されたいんですか

「マゾですか？」

まだ起きる気配を見せない、それなら……

「咲夜さん！？美鈴さんがまた寝ているんですが！？」  
と大声で叫ぶ。

すると美鈴さんが目を覚まし、慌てて私の口を塞いだ。

「あわわわっ！呼んじゃだめですよっ！！」

「んっ！！んっ！！」

私は必死にもがく。

息が……出来ない。

「ちょ……何をしている！！」

霧華が助けに入った。

私は美鈴さんの拘束から解放される。

「許斐さん……あの人だけは呼ばないで下さい。」

「もう叫んじゃったんですけど……。」

つい私は乾いた笑みを浮かべる。

聞こえたかは貞かではないが、いや、貞かではなかったようだ。

美鈴さんにとっては来て欲しくなかった人がいつの間にか美鈴さんの背後にいた。

しかも不気味なほど笑みを浮かべて。

「今ちようど貴方の所に行こうとしていたのよ？」

「ひいっ！！咲夜さんっ！！」

まるで妖怪に声をかけられた人間のような驚き方をする。

種族でいえば逆なのだが……

「まったく……せっかくの客人を目の前に寝ている門番とは前代未聞よ。」

「ご、ごめんなさいっ！！」

「……次の給与査定、楽しみにすることね。」

おお、ついに肉体的な罰ではなく給料減額の罰となっていました。  
美鈴さんも真面目に働いていれば……

「さて、お客様は何用で？」

さすがに客人を前にこれ以上の罰はないか……

「レミリアさんにお話があるんです、私としては重要な。」

「重要かどうかはこちらで判断いたしますわ。とはいえせっかく来てくださったのですからどうぞこちらへ……」

と言われてメイド長に誘導される私。

霧華もついて来ようとしたが止められた。

「先日はどうも暴れてもらいましたね？」

「……………」

咲夜さんが冷ややか視線を霧華に向ける。

霧華は無言だった。

「流石にお嬢様に刃向かった輩を紅魔館に入れるわけにはいきませんわ。」

「いえ、今回はこの子も強く関係する話で……………」

「それなら致し方ないですね。」

咲夜さんは仕方なさげに霧華も中に入るように促す。

そして私達は紅魔館に入ってしまった。

さて、紅魔館のあとはどうしよう……

とりあえず魅歌様とお話をしなければだし、紫様や幽々子様にも話をしなければならぬ……

「はあ……………」

つい溜め息をついてしまう。

それは用事が山ほどあることではなく、休暇だというのに仕事時と同じように考えを張り巡らしていることに対してだ。

状況が状況なのだから仕方がないのだが……

そうこう考えているうちに私達はレミリアさんの部屋の前に立つ

た。

咲夜さんが部屋のドアをノックする。

「お嬢様、許斐がお話をしたいそうなのですが。」

「入れなさい。」

咲夜さんはドアを開けて中へと入る。

私と霧華は咲夜さんの後に続いて入る。

そこには待ち兼ねていたような笑みを浮かべたレミリアさんがいた。

「おはよう許斐。」

そういえばまだ夜になって時間が経っていなかったか。

「おはようございます、レミリアさん。」

「で？これから食事って時に話って？」

「まずは紅魔館を荒らした事をこの子に謝らせに来ました。」

「ごめんなさい。」

霧華は深々と頭を下げる。

それを見たレミリアさんは未だに笑みを浮かべている。

「形だけの謝罪では許さないわ、何てったってこの紅魔館が荒らされたんだからね。」

「じゃあ、どうすれば……？」

「一週間……」

「はい？」

「一週間紅魔館で働きなさい、許斐とその辻斬りでね。今回はそれで許してあげるわ。」

「へ？私ですか？」

私は目を丸くした。

「当たり前よ。保護者という意味で連帯責任を負ってもらうわ。」  
「いつ保護者になったんですか……！……とは言えずに私は首を縦に振った。」

「ここで無理に断ろうとしても話が進みそうにないからだ。」

「フフ……素直でよろしい。」



レミリアさんは満足げに笑う。

「それで事件の事ですが……」

「分かっているわよ、その子が犯人じゃないんでしょう？」

「っ！？……………何故それを？」

「全ては運命。私の手の中よ。」

「運命？」

そういえばレミリアさんは『運命を操る程度の能力』を持っていたんだっけ……？

それなら話す手間が省けるか。

「なら辻斬り事件については何か情報が？」

「無い。」

見事なまでの即答であつた。

そしてその言葉を聞いて私は肩を落とした。

「……ただ、仮にも九十九神を操る力にパチエが興味を持っているわ。その力がなんなのか分かれれば犯人は特定しやすいんじゃない？」  
確かに魔術となれば特定は出来るかもしれない。

「咲夜、案内してあげなさい。」

「かしこまりました、お嬢様。」

もちろん向かうのは地下の大図書館。

私は事件解決の希望を見つげるためにも顔を上げるのだった。

崩天歌ノ九『紅魔館』（後書き）

長かった……お待たせしてすみませんでした。  
リアルが忙しい、これから楽になりそうになりそうですが……。

このような更新スピードですが今後ともよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9948x/>

---

東方崩天歌

2011年11月24日23時03分発行